

# 温暖地における新しい緑飼作物



タンパラの栽培について

## 薄 巖

温暖地では、夏期高温多照が続ぎ、早魃のために、牧草類は衰退して生育不振となり、夏枯れ時期に入り、酪農家にとっては本当に辛い時期です。このような酷しい夏枯れどきにも、タンパラは非常に旺盛な生長力があり、青々とした生育を続けます。厚播しても下葉の枯れ上りが少なく、日陰にも強く、早魃の年には盛夏期に銹病状の病徴が現われることもあります。病害には比較的強いようであり、茎葉ともに家畜の嗜好に適し、一〇刈当たり、九、〇〇〇〜一万キ程度の収量は容易であります。春播であるが、収穫期は頗る早く、播種後五〇日位で刈取りができて、七月上旬に始まり最終刈取りは九月中旬旬に終わるのが特徴であります。



盛夏時に良く生育するタンパラの生育状況

タンパラは、はげいとうに類似した新しい緑飼作物であります。

鶏、豚、乳牛、いずれも好食し、よく作ると一〇刈当たり、一万キ位の収量があり、短期間に生育し、盛夏でも非常に旺盛な生長力があり、ひと夏に三〜四回刈取れるので、夏のツナギ飼料として都合のよい作物です。近年各地で試作され、当地方でもかなり栽培がふえてきましたので、以下、タンパラの性

状、栽培法、利用法などについて記述し、飼料の増産にはげまれる酪農家の皆さんの参考になります。

### 一 性 状

タンパラは、ひゆ科の植物で、草姿は抽臺せるホウレンソウに類似し、茎葉とも非常にやわらかく、生育初期においては食用としても美味しいようであります。草丈は一・五メートルに達し、分枝が多く葉は著しく豊富で、一本の分枝から、五〜六枚の小葉が着生し、分枝の上部に大型の葉が各々二枚位ずつ着いている。

第1表 タンパラの成分量 (%)

成分	項目	新鮮物中		風乾物中		乾物中		新鮮物中 1kg中 g
		葉	茎	葉	茎	葉	茎	
水分	分物	91.5	93.6	8.6	15.5	—	—	—
風乾	乾物	9.3	7.6	—	—	—	—	—
粗蛋白質	物質	8.5	6.4	91.4	84.5	—	—	—
粗蛋白質	無窒素	2.4	1.1	26.3	15.0	28.7	17.7	15.2
粗蛋白質	纖維	5.5	3.8	58.9	49.0	64.6	58.0	47.0
純蛋白質	維白	0.6	1.5	6.2	20.5	6.8	24.3	10.2
	白	2.0	0.9	21.2	12.0	21.2	14.3	12.2

分析・千葉県農業試験場 昭37.8.28

### 二 土地の選び方

タンパラは、高温を好む草であるから春先の晩霜などには弱い、耐暑耐旱性には非常に強く、幾分酸性の土壌でも容易に栽培ができ、温暖地においては比較的土壌の選択性は少なく、洪積層軽しょう土台地でもよくできる。直まきで短期間に収穫できるので輪作に組み入れやすく、桑園間作、果樹園の下作、畑作など、どんなところに栽培してもよい。このように土地を選ばないうえに、間作、混作もしやすく、牧草の夏枯れどきに短期間に多く収穫ができ、多汁質で栄養価も高く、夏の青刈りツナギ飼料としておおいに活用したいものです。タンパラの成分量について分析を行なった結果は第一表の通りであります。

第2表 播種期試験成績

播種期	1 番 刈					2 番 刈					合 生 草 計量
	刈取日	生育日数	刈高さ	草丈	10%当量草重	刈取日	生育日数	草丈	10%当量草重		
月日 5.10	7.14	日65	15	101	7,050	8.25	日42	85	3,820	10,870	
6.10	7.26	46	15	77	4,200	9.17	48	72	3,250	7,450	
7.10	9.12	64	10	124	4,350	—	—	—	—	4,350	

(昭和36年 千葉農場)

備考 播種方法 畦幅60センチ条播 施肥量(10%当たりキ) 堆肥1,000 硫酸15  
過石40 塩加10

第3表 青刈収量調査成績

播種期	抽苔始	開花期	1番刈(刈取高さ15%)				2番刈(8月14日)				3番刈(9月19日)				10%当量草重
			刈取日	生育日数	草丈	10%当量草重	刈取日	生育日数	草丈	10%当量草重	刈取日	生育日数	草丈	10%当量草重	
月日 5.1	月日 6.27	月日 8.12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
5.15	7.4	8.15	7.11	57	58	2,505	34	114	4,580	36	92	3,300	10,385		
6.1	7.12	8.17	7.26	46	88	4,710	19	62	2,640	36	86	2,070	9,420		

(昭和37年 千葉農場)

注 5月1日播種は、発芽は良好であったが5月上旬の晩霜の影響で殆ど枯死した。このために、青刈収量調査ができなかった。

備考 播種方法 畦幅60センチ条播 施肥量(10%当たりキ) 堆肥1,000 硫酸25(内追肥10) 過石15 塩加15 苦土石灰60

### 三 栽培法

(1) 播種期

タンペラは低温に弱いので、強い晩霜の心配がなくなる四月下旬から始まり、七月上旬まで長期間に亘り播くことができますが、あまり早過ぎると強い晩霜のために稚苗期に全滅することもあり、初夏に入ってから遅播では再生力が弱く一番刈りで終わり、減収いたします。

播種量は、種子が極めて微細なので僅少

で結構ですが、一〇%当たり、三〇〇〜五〇〇%位が適量です。条播、撒播、どちらでもよいが、条播の場合は、畦幅五〇〜六〇センチ、覆土はできるだけ浅くし、播種ときには降雨がなく、表土が乾燥しているときには、覆土後鎮圧をすれば発芽が揃います。

第二表、第三表の試験成績を見てもわかりますように、五月中旬播種が収量多く、六月、七月と播種期が遅れるに従って急激に減収しているため、播種期が大きく影響するものであります。

(2) 施肥量

タンペラは、どんな土地にも栽培できるが、肥料は少なすぎてもよいわけではなく、多収の場合には施肥量も多くしなければ

この結果から見ても、温暖地におけるタンペラの播種適期は地方により若干の差はありますが、当地方では、数年間の播種試験の結果から五月中下旬頃が適当であります。

生育中の手入れは、あまり密植すぎる場合は間引をするが、どちらかといえば、やや厚い方がよく、株間五、六センチとする。タンペラは、再生力が旺盛なので、早刈りをすれば三、四回の刈取りができます。当農場で行なった三回刈りの例を示すと、第三表の通りで、合計一〇%当たり、五月十五日播種が、一万三八五キで、六月一日播種が九、四二〇キの青刈収量である。

#### 四 収穫と利用法

一般には、一〇%当たり、堆肥肥一、〇〇〇〜一、五〇〇キ、硫酸は元肥に一五キ追肥に一五キ、過石は三〇〜四〇キ、塩加は一、二キ、このぐらいの施肥設計により、一万キ近い収量を得ることができましょう。

窒素肥料は増収効果が高く、追肥には硫酸か尿素でもよいが、一番刈り二番刈りの刈取直後に、畦間に畜尿を追肥するのもよい方法です。



右側タンペラ(抽莖期) 左側バイアム(出穂期)

刈取り一番刈りは播種後五〇日位からできて、一ヵ月に一回の割合で、早刈りをすれば四回の刈取りも可能でしょう。刈取り回数を増せば合計収量が著しく増加するものではないが、適地に充分な施肥管理をして旺盛な生育をさせれば、緑の若い良質な飼料が牧草の夏枯れどきに、時期的な配分宜しく収穫できることが有利な点であります。

刈取りの方法は、一番刈りは早目に、抽莖期の草丈六〇センチぐらいの時がよく、あまり遅れると茎が硬くなり、嗜好性が落ちて再生力も弱くなります。刈取回数を多く行なう場合には、なるべく低刈りをしてないように注意して、地上より約一〇〜一五センチぐらい残して刈取ることが肝要です。これは、タンペラは抽莖したら生長点に関係なく、根元からの分枝及び葉の付根から出た芽が生長する特性があるからであります。タンペラは水分多く、繊維が少なく家畜の嗜好消化も良好であり、鶏、豚が一般の葉菜類以上に非常に好みますが、乳牛、其の他の家畜も好ましいです。

以上、タンペラの栽培について知見するところを述べましたが、極めて作りやすく、多収で、家畜の嗜好性に富む緑飼作物でありますから、温暖地における酪農家の皆さんに、夏枯れ対策用のツナギ飼料として是非栽培されんことを、お奨めするものであります。(雪印種苗・千葉農場)